
終わりのなき物語たち 一短編集一

ばいばるす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

終わりになき物語たち ―短編集―

【Nコード】

N7435B

【作者名】

ばいばるす

【あらすじ】

書き始めたもののそのままに放置された物語達を、短編として集めたものです。なるべく独立した作品として読めるよう、多少の手直しはしてありますが、ラストらしいラストを期待されると、がっかりされるかもしれません。

その一 覚醒

その世界はやたらとちっぽけで、何もなかった。

右足を繋ぐ、重く頑丈な鎖と、冷たく湿った床と、四方を塞ぐ壁だけが、己の知覚を確認できるよすがだった。

深く塗りこめられた闇の淵、凍りついた時間の中で、気の遠くなるような静寂が、耐え難くのしかかり、ともすれば崩壊寸前の精神が、自分に残されたただ一つのもの、自我さえも手放してしまいかねなかった。

永遠とも思える責苦。発作はなけば周期的に襲ってくる。それは丁度、寄せては引く波のようだ。卑小で無限な世界の中、暴れ、叫び、涙する物体が、ただ自分のみだという事実に錯乱する時間が過ぎれば、あとは痴呆のような放心状態が待っている。

何も感じず、何も見ず、自分という存在を明け渡し、死んだ魚のように虚無の凧に身を任せるのだ。次に来る嵐の時間まで。

なぜだろう？自分は誰で、ここは何処で、世界はどうしてこうなのか？はじめの頃は、そんなことばかりを考えていた。だが、応答者のいない世界でこれは無意味な設問だった。一方通行の思考は、そのうち自問自答のメビウスの輪となり、いつしか狂気の階段を下っていく。

だから、問いは封印した。それが答えられるべき問いであるならば、なされるべき時と場所に、しかるべくして、なされるものなのだろう。だから、それまでは正気を保つために、その質問は禁じられるべきなのだ、理解した。

ここに「時」というモノが存在すると確信したのは、闇がコノ字に裂け、光というものが、この世界に斬りこんできた時だった。初めての変化だった。

目蓋の存在理由が実感された。完全なる闇の中では目を閉じていようと、開いていようと、映るものは変わらない。それは外界から

の強い刺激を軽減するためについていたのだ。

光は一瞬にして、世界を破壊した。何万何億という光の矢が目蓋を通してさえも目に突き刺さる。その鋭い痛みへのたうちまわりながらも、心は歓喜に震えた。

これは産みの痛みなのだ。世界は止まっていた時計の針を再び動かしはじめた。

目を覆っていた目蓋と両手をおそろおそろ取り払ったとき、それまでの世界は崩壊し、新たな再建を遂げていた。駆逐された闇はいまやちつぽけな部屋の片隅に昔の威光を留めるばかり。触感にたよる事なく知覚される自分の体。

視界という新たな贈り物に、狂気し、己の体と、かつて世界の全てでありながら、それまで見る事のなかったものたちを飽くことなく、眺め続けた。

手も、足も、指も、胴も、くるぶしまで伸びたべとべとした髪も・
・それらは奇妙で見たこともない姿を晒して、そこにあった。あれほど固く、自分の足を捕縛していた鉄鎖も、光の洗礼のあつて塵と消えた。変色し、擦り切れた足首さえ見なければ、そんな物に繋がれていた事実さえも忘れてしまいそうだ。

内奥から突き上げてくる何かがあった。それは嗚咽となって喉を震わせ、頬をつたって床に落ちた。

その感情の名前を自分は知らない。

理性を一息に呑み込んで、貪欲に肥大していくそれは、今まで覚えだどんな感情をも凌駕する甘美さで、自分を満たした。

新しい世界はすぐそこにあった。それは光に満ち溢れ、美しく感動的だった。古い世界を長方形に切り取って、自分に手を差し伸べる光の世界。

だが、たとえそれがどんな醜い世界であつたとしても、やはり自分の足は止まらなかつただろう。それがどのような変化であれ、変化であるかぎり、自分はそれを祝福する。停滞の淀みにあつて、自分はこの時をひたすらに待ち焦がれていたのだ。

だから、くぐった。二つの世界の境界を。一寸の迷いも戸惑いもなく、その新しき世界を、我が身に受け入れた。

その二 嘘そ

誰もが皆、嘘をつく。毎日、毎時間、寝ていても、起きていても、夢の中でも、喜びのさなかでも、悲しみの淵でも

その舌が動かずとも、その腕、足、視線、その態度を通して、欺瞞は表される。

マーク・トウェインは、そんなことを書いている。

そう、僕達は日々、嘘の中に生きている。人を騙すための嘘、氣遣つての嘘、自分をよく見せるための嘘、守るための嘘……形こそ変われど、僕達は常に欺瞞を通して、人に接し、自分を誤魔化し、やがてそれなしでは生きられない体になっていく。嘘が上手くなることは、大人になることの必要条件だ。

結局のところ、嘘は社会の潤滑油であり、人間の精神安定剤だ。お世辞、面接、論文、社交辞令、意中の異性を口説く時……一体、僕達はどれだけの躊躇いをもって、真実ではないことを臆面もなく並べ立てていることだろうか。もっと自覚を伴う、嘘の名に恥じない嘘であっても、僕達は自己正当化というフィルターを通して、折り合いをつけているものだ。いよいよ正当化出来なくなったら、こう言えばいい。誰だって、ついているじゃないか。嘘の一つや二つくらい。

周囲を魅了する人間は、だいたい嘘が上手い。服装から化粧品に至るまで、その外見を粉飾し、笑顔や話術といった処世術に長けていて、そんな自分に自信を持っている。思ってもない事をいつて相手を喜ばせ、思ったことを口にしないことで、無駄な軋轢を避ける。適宜に嘘をつけない愚かな正直者は、社会の不応者として脱落する運命にある。そういう連中は、正直な自分がなぜ不当に遇されるのか理解できないでいる。彼等の価値基準によれば、嘘を罪であり、清廉潔白は美德の最高峰である。お世辞ひとつ満足に言えず、異性ひとり充分に口説けない彼等は、不満を困い、鬱病を患い、狂

人とまでいわなくても変人の烙印を押され、早晚、社会から締め出しをくう運命だ。

僕達は、嘘の下手な人間を嫌う。僕等には、彼等がこう言っているように聞こえる。

「王様は裸だ！」

そんな事、みんな分かっている。分かっている、皆、王様の服を着て歩いているのだ。お前は裸だと、指摘すれば、必然的に自分も裸だと認めざるをえない。それは、この社会において、人の陰部を指し示すほどにも下品で無作法な行為だ。

僕達がかぶる虚構という名の仮面は、こうして皆の暗黙の了解の上に成り立っている。おかげで、その下にある、あまり美しいとは言えない素顔を、普段は意識することもなく暮らしている。

夜も昼も被り続け、もう長いこと外したことなどない仮面は、既にして皮膚の一部になったかのように、他者のみならず自分までをも騙しおおせる。もうずっと、洗顔などした事のない厚化粧なのだ。落とさぬうちから十重二十重に塗りたくった厚手のドウランを取り去ったとき、鏡に映る自分の顔を、果たして自分だと認めることが出来るだろうか？それを正視することに、耐えられるだろうか？

何の事はない。人生とは死へと続く一本道であり、人は絶え間ないゼロサムゲームの中で、パイを奪い合って生きている。楽しい筈はないのだ。人生は生きるに易い場所ではない。

そう、嘘は必要だ。僕達が生きていくために。正気を保つために。僕達が僕達であるために。

その二 二つそ（後書き）

マーク・トウェインの言葉について：作者が勝手に英文を訳したものであり、訳の正確さは保障しかねます。すみません。

その三 緋の眼（上）

「さあ、喰え」

汗が一筋、背骨をつたい落ちた。冷や汗なのか、脂汗なのか、良く分からない。

「餌だ。喰え」

どさつ、と重いものが床に落ちる音。

目を閉じていても、それが何なのか分かる。

食い物。

（違う、そうじゃない）

匂いが鼻孔を満たし、口の中が泡になる。感覚など当に無くしたと思っていた胃が覚醒する。締め付けられるような飢餓感が戻ってきた。胃液が逆流しそうだ。

もう何日、口に物を入れてないだろう？

腹部は背中に張り付き、喉は乾きにひりつく。今まで、口腔の唾を掻き集めては下し、凌いできた。だが、どうだ。今は何の努力も無しに口から溢れんばかりだ。

「さあ・・・」

促す声。そその匂い。目を開く。

（違う、駄目だ。だって、それは・・・）

それは、床に置かれていた。

捕縛され、床に伏せたまま、ぴくりとも動かない。しかし、それはまだ生きているのだという確信は微塵も揺らがなかった。でなければ、これ程までに香しい生気の匂いに説明が着かない。新鮮で暖かい血の温もりが、距離を隔ててさえ、染みるように伝わってくる。

餓えと乾きが、胃から喉から、体中に這い上がってくる。

ぞくぞくする。脳髓が痺れる。理性が思考をやめ、原始的な衝動がその座を襲う。

もう起き上がれないと思っていたほど弱っていた体が、獲物を前に筋肉を収縮させる。あれほど弱っていた筈の体が、動く。

側によるほどに生々しくなる、濃密な芳香。

誘うように上下するその喉に手をかける。滑らかな肌触り。触れた箇所から、ぽつと火の灯ったような感触が指先に宿り、何かがあるから流れ込んでくるのを感じた。

空腹を満たし、欠乏を埋める、命、そのもの。糧、そのもの。

(・・・腹が減った・・・喉が)

闇の中に、はっきりと浮かび上がる白い皮膚の下に、血管を想像する。その中を流れる細流の音さえ聞こえてきそうだ。

(・・・駄目だ)

何が駄目なのか、もう分からない。

歯がむずがゆい。特に、犬歯。きしんで、音を立てる。いや、爪が。

腕が強張り、喰い込んだ爪が、皮膚を割く。

そこに一筋浮かんだ朱が、視界を染め、食欲以外の全てを消し去った。最後のタガが弾けとび、体がひしむ。目が、手が、口が、爪が、歯が、牙が、それしか考えられない。

「うわあああっ！！」

続く行動を制したのは、耳元で突如発せられた大音量だった。少年はびくり、と獲物の喉に埋めた顔を上げる。目と鼻の先で叫声を上げているものが、一瞬なんだか分からなかった。

恐怖に見開かれた翠の瞳。白い面は引き攣れて、唇は尚も何かを叫ぼうとするかのように喘ぐ。逃げようと飛び退るも、後ろ手に縛られた体勢では、思うににならない様子だった。

それは、男だった。人間の、男。

「・・・ば、化け物っ」

ようやくそれだけを言葉にし、後は荒い呼吸を繰り返すばかりの人間の男。その首筋に流れる血を見つめる内に、我に返った。自分が何をしたか、何をしようとしたのか、理解した。

冷水を浴びせかけられたように、それまで少年を突き動かしていた熱が嘘のように引いていった。飢餓感に代わって、喉を何かかせり上がってくる。

金縛り状態の男から体を引き離したのは少年の方だった。後ずさりし、途中で崩れ落ち、膝をつく。こみ上げてくる胃酸の匂いにむせ、咳き込んだ。

床に両手をつき、体を丸める。吐きたくとも、吐くものはもう残っていないかった。胃は当の昔に空っぽで、嘔吐の発作の度に体が傾ぐが、床を濡らすのは胃液だけだった。

「無様な。これほどまでお膳立してやって尚、獲物の悲鳴一つで怖じ気づくとは」

少年は口元を拭い、顔を上げた。

ずっと、そうやって立っていたのだろう。見下ろす緋色の眼差しは、口調に違わず、冷ややかだった。そこに宿る人外の光。体温の感じられない、上等な紅玉のように無機質な光彩。魂の底まで突き刺さるような鋭い双眸。人を萎縮させには置かない目だ。

少年も、そうだった。この目が恐くて、いつも彼に対する時は面と向かって話せなかった。

だが、今は、ずっと苦手だったその視線をまともに受けることが出来る。返すことさえ。

「こんな事をしても無駄だ。俺は人を喰わない。絶対に」

その三 緋の眼 (上) (後書き)

まだ続きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7435b/>

終わりなき物語たち -短編集-

2010年10月20日00時29分発行